



特別
又6
9304
A 1



柳の心晴まの 初めより 末めまで ありて 晴々若南し
世態と 官徳正しく 無倒の相 守りて 此の世の 人のあり
と 一まへに 達順の 候も 世の 人のあり 柳の
徳と 人の 徳を 交へて 最大の 徳を 成す 人の 徳あり
人の 無常の 心 何れも 谷利に 金徳を 守りて 人の 徳あり
馬郡山 ありて 柳の 末枝を 守りて 世の 徳あり 十年万
の ありて 世の 徳あり 柳の 末枝を 守りて 世の 徳あり
のみ ありて 世の 徳あり 柳の 末枝を 守りて 世の 徳あり
氏の 徳あり 柳の 末枝を 守りて 世の 徳あり 柳の
末の ありて 世の 徳あり 柳の 末枝を 守りて 世の 徳あり
秋通の ありて 世の 徳あり 柳の 末枝を 守りて 世の 徳あり
柳の ありて 世の 徳あり 柳の 末枝を 守りて 世の 徳あり

以上一言を以て
人生の形は其の
世の形は其の
心は其の
謙謙なり

六代を以て 序あり 七代を以て 前より 後より
り 世態と 官徳正しく 無倒の相 守りて 此の世の 人のあり
と 一まへに 達順の 候も 世の 人のあり 柳の
徳と 人の 徳を 交へて 最大の 徳を 成す 人の 徳あり
人の 無常の 心 何れも 谷利に 金徳を 守りて 人の 徳あり
馬郡山 ありて 柳の 末枝を 守りて 世の 徳あり 十年万
の ありて 世の 徳あり 柳の 末枝を 守りて 世の 徳あり
のみ ありて 世の 徳あり 柳の 末枝を 守りて 世の 徳あり
氏の 徳あり 柳の 末枝を 守りて 世の 徳あり 柳の
末の ありて 世の 徳あり 柳の 末枝を 守りて 世の 徳あり
秋通の ありて 世の 徳あり 柳の 末枝を 守りて 世の 徳あり
柳の ありて 世の 徳あり 柳の 末枝を 守りて 世の 徳あり

まづ人生の正を解して
後世を願ひ一はあらそ
ろの世の何事も世の正
に下りしむるを正とせ
るに而も自ら心せしむる
今人の正なきをわしめし
以て事善の正を正とせし
なり

世の正を解して
後世を願ひ一はあらそ
ろの世の何事も世の正
に下りしむるを正とせ
るに而も自ら心せしむる
今人の正なきをわしめし
以て事善の正を正とせし
なり

世の正を解して
後世を願ひ一はあらそ
ろの世の何事も世の正
に下りしむるを正とせ
るに而も自ら心せしむる
今人の正なきをわしめし
以て事善の正を正とせし
なり

ひらたま無地松の房也

ひらたま
無地松の房也

登ふかーまどくろ
風はひいさういさか
りーもめい
こら
考ふまどくろへすえ
青へぐち下の曲陰
を呼英さん為の伏線
か

釘もて持行きけりよと恨みさざりゆりし折れ釘
打ちけし其社のまゝ合せけりお比鞍ぎ子折角一めせ
し腹の竈まゝ燃上りて身は湯上りの汗だらりと
苦くせれど一時と支ぐ床子入りて五幅の蚊帳の内
を天地と二けまゝも思ふ人あけぬバ結句合せある
男よりやうく汗やうくぬすて目もおどろまんとき
る頃中下の下太股のめこり登るチリとぬめ
まゝるるお震ひぬりていまこゝ初めの程ハ一と手
たさし伸べてさありて梅やさをこらぬけれど中頃
苦子ある程は増く苦く果ては青へぐちをつきて、うぬ
富士の山をせくる様共一匹崎らど潰ぶぬよと折中え

文ど
し
ん

お中者受揮のせら
ものも兼たまうて
蚊ふくしれ、思んえ
ちあれど
みんあう、あ、あ、あ、あ
う、う、う、う

後腕の中をさまぬきし
ハ風脈うて極そのさま
能う
Dumetopaena Gata
かまんと死のいたむね地が
か耳さうさうさうさうさ
らんらんらんらんらん

漢園を煽る蚊帳の釣手切きてバツタリ編の中
魚とあかりむり出て太き吐息おふんどく
と打らぬ用もあき候所も遠みて敵を黨糧あ
くれどど見角無念なりて床入りぬが凝るハ思案
下枕におと今夜ハ念も蚊も歯をくすむりて堪
へけらほむもやうくうつらくせる頃耳元の押入れ
お鼠やうまゝ米饅がりとかがり立てるも捨てる
も置かれず起きてシツくと息掛へどもけらん
茶腕の中を診まゝなるを米饅取出して床のぬみ
揺る漢園を流す頃ハオシカラリンと早や膳の上の
さじがさいまくさこらんられず手をささし伸べて
押入れの戸がごとくあがりあがり一本のあも五合の

らんらん
らんらん
らんらん
らんらん
らんらん
らんらん
らんらん
らんらん
らんらん
らんらん

作のせりあふりあふりあふり
牛歩の思ふらん一と知し二と知らぬ

持事漫言

難波文学会

昔ハ元禄の文波難波の沖子きらめきける文化文政
より花束を高替へて明治も江戸のせとハはこ
ゆど神にありて祝事きあへて浮世草紙神楽
地の本家外子ハ許をまどき格と先祖を何事のけり
みえつくゝ難波の文風今見ると此度新設の寄
せ場の大きらハ難波文学会より出たる「難波がこゝ
第一座を西村天因園藤生牧彼身七八人の出揃下
野ハ見事次才南さ祝事大誇ハ例よりよつて若旦那
手代の改増り

発行停止

けはる
用紙
採科

一やの仕業をいふの

露国皇太子殿下の負傷

殿下の御負傷は日本全国民に大なる感銘を与へたり
文学海は影響をうけて止まんや諸子活目して
其陰影を捕捉せよ

東京文学家の動向

春の屋主人ハ「梓御子」といふ批判文を讀賣新聞に出
し竹の屋主人は「吾月居士」といふ筆名を取らぬ嵯峨
のや主人ハ「新報」記者と用心して朝日新聞社に入り
秋外漢ハ「名譽客」として繪画美術の品評を
日ハ「年子」出「此頃又自由新聞社に聘せらるる不

以落と投て吾等ニ示す
ハ主仕業者の責をこらぬ
さういふ

まよふまでも思はれ士
は文をいしと對て養育せし
方

和後主人元祿文藝者と西洋文藝者の仕入の事忙しく
戸川残花雲峯子新体詩の製作に力を込め井上通
泰長哥を出さんとあつとむ櫻痴居士妙子筆歌子
忙しかり新子「春日局」といふ脚本を書き尚ほ讀
賣新聞より自らの脚本を出さんと云々此外の文藝者
ハ別子愛り無きやうなり

新刊書物及雜誌四英

- 国文派子ハ 国文辞典 国語学(南根氏の文法)
- 漢文派子ハ 東洋文字全書 漢文字講義録
- 古書出版派ハ 新編大和文範卷二(三好木田等の校中) 鐘倉三
代記 海我公積山等
- 山陽堂派子ハ 新猿面冠者(宮内府書) 今から事(三)

猿面冠者ハ此月の新刊
ありや
春陽堂也

少の辨^ヤ一^凡を^時事
の^梅と^草を^まし^せと
今^少く^新密^子且^石確
子^新い^まし^か也^後この
考^考た^まし^ます^のこ^のこ
ん^子〜

三階堂^夢 寿^此外^子博^文社^の教^令并^慶 (江^久水^限事)

